Message from the Principal

西武文理学園小学校 校長 飛田 浩昭 先生

❶ 文理ファームで、農作業を体験し、食物への感謝の心を育てる
❷ 3年生では「八芳園」にて、保護者とともに和の作法を学ぶ。会席料理を通じて、食材の味わい方や入室時のふすまの開け方など、総合的な和の礼儀作法のレクチャーを受ける
❸ 併設校の先輩である西武学園文理高校の理数科生から自作ロボットを動かすプログラミングを教わり「文理サファリパークを作ろう」をテーマにプログラミングを体験している
❹ 児童たちは先輩のサポートのもと、自ら作り上げたロボットの動きに感動し、最新のIT技術に興味を深めた

School data

2004年4月、学校法人文理佐藤学園によって埼玉県狭山市に開校。西武学園文理中学・高等学校とともに12年一貫教育を通じて、グローバル社会でリーダーシップを発揮できるトップエリートの育成を目指す。そのために英語教育と理数教育に力を入れる一方、日本人としてのアイデンティティーを育てる心の教育も重視。卒業後はほとんどの児童が文理中学校に進学。

https://www.seibubunri-es.ed.jp

コロナ禍で、この2年間、海外研修は実施できていません。特に6年生はイギリスもアメリカも行くことができなかったので、今年は、感染者が少ない春の時期に、3泊4日で、日本の国際交流の曙ともいえる長崎に行きました。また、秋には成田で2泊3日のイングリッシュ・キャンプを行いました。海外研修ができなかったのは残念なことですが、国内の研修でも子どもたちはとても充実した時間を過ごし、やって良かったなとつくづく思いました。

農作体験、ロボット制作など理数教育では体験を重視

本校では理数教育にも、文理中学・高等学校につながる学びを意識して積極的に取り組んでいます。理科教育では、豊かな自然環境を生かした体験学習を多くしているのが特徴の一つです。キャンパスの周辺には田園地帯が広がり、歩いて10分ほどのところには学園が所有する文理ファームがあります。子どもたちはここで田植えや稲刈り、またサツマイモやジャガイモ、落花生、大根などさまざまな作物の作付けから収穫までを体験します。近くを流れる入間川にはヤゴが生息しているので、捕まえてきて羽化するまで観察する授業もあります。都心の学校ではなかなかできないことだと思います。

物理的な内容においては実験をたくさん用意しています。また文理高校には理数科があり、学期中に2回、そこの高校生たちが先生となって4～6年生にロボットプログラミング講座を開講してくれます。一緒にロボットを組み立てたりプログラミングを体験したり。5歳ほどしか違わないお兄さん、お姉さんたちが豊富な知識を持っているので、子どもたちはあこがれを持ちます。これがとても良い教育効果につながっています。

また、5・6年生の希望者対象ですが、埼玉医科大学との連携による「キッズ医療体験」のプログラムもあります。保護者と一緒に施設見学や体験実習を行うものです。小学校時代に体験したことが将来の進路選択に影響を与えることは多いため、本校ではこのような取り組みを大切にしています。

和食の作法から奉納神事まで日本の伝統文化を理解

本校での教育を土台として、子どもたちには世界のトップリーダーになってほしいと願っています。そのときに大切になるのは日本人としてのアイデンティティーを持つことです。本校が「心を育てる」ことを柱にしているのもそのためで、和の作法や伝統文化を正しく理解するためのプログラムを数多く取り入れています。3年生で行う「八芳園」でのマナー教室はその一例です。ここでは和食を頂く際のお作法から、玄関での靴の脱ぎ方やふすまの開け方などまで、一つひとつ学びます。

日本の文化の土台は稲作にあります。文理ファームでの稲作体験では、稲を育て、収穫するだけではありません。刈り取った稲穂の一部を学校の隣にある八雲神社に奉納します。稲穂の奉納は、五穀豊穣の恵みに感謝する日本の伝統行事です。その日は神主さんに来ていただき、玉串の捧げ方のお作法を習います。おそらく日本全国で、玉串の捧げ方を教える小学校はほかにないのではないでしょうか。

神主さんには、日本人が手間を掛けてお米を作っていることも話してもらいます。今年はそのお話の後を受けて、私がフードロスの話をしました。そうした話が心に残ったのでしょう、翌日から給食の残食が見事に少なくなりました。これこそ食育です。

子どもたちの心に届くたくさんの種をまきたい

私は4年前に本校の校長に就任して以来、週に一度、道徳の時間に「校長講話」を行っています。毎回、立派な行いをした人物を選んで、その生き方について話しています。授業が終わった後には子どもたちに感想を書いてもらい、コメントを書いて返しています。

先日はハンセン病患者の治療に生涯を捧げた小笠原登医師の話をしました。小笠原さんは一貫して国の隔離政策に反対し続けた方で、話を聞いた子どもたちの感想には、はっきりした発達段階が現れていました。低学年は「家族と別れて生活をするのはかわいそう」といった感想が目立ちましたが、学年が上がると隔離政策や偏見、差別といったことに言及してきます。

1954年9月に、台風の影響で沈没した青函連絡船・洞爺丸の海難事故に遭った宣教師、アルフレッド・ストーンさんの話をしたこともあります。ストーンさんは救命胴衣を日本人の若者に渡して自分は遭難死してしまいました。子どもたちは、ストーンさんが自分のお父さんとあまり変わらない年齢だったということもあって、とても感銘を受けていました。

以前、卒業した児童の保護者の方から手紙を頂いたことがあります。感謝の言葉とともに、「先生のお話は娘の心にしっかり届いていました」ということが書かれていて、続けていてよかったと思いました。

子どもたちの心にいかに〝刺激の種〟をまくことができるか、それが教育のキーワードだと思います。さまざまな経験を数多く積むことによって自分の価値に気づき、自己肯定感が高まっていきます。このため朝の会では子どもたちを表彰しています。英検®に合格した、水泳で進級した、漢字検定を取ったなど、どんなことでもいいのです。みんなの前で表彰して、チャレンジしたことをみんなが拍手をして認め合う。こうした時間がとても大切です。

都心の学校では望めない豊かな自然環境のなかで、子どもたちはたくさんの刺激を受けながら伸び伸びと育っています。ぜひ一度来校して学校の雰囲気を味わっていただき、選択肢の一つに考えていただければうれしく思います。

全身を使って英語を習得

タブレットPCの操作方法を学び、卒業研究へとつなげる

立派な人物を紹介し、その人物から学ぶ。「こころを育てる」校長講話

※英検®は、公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。

©朝日学生新聞社　掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。